

家族介護者の介護負担感を軽減する因子の探索

○日本福祉大学大学院 平松誠(06220)

近藤克則(日本福祉大学) 梅原健一(南医療生協かなめ病院)

[キーワード] 介護負担感, 家族介護, 介入支援策

1. 研究の背景・目的

要介護高齢者の家族介護者の介護負担感は大きく、介入支援策が求められている。適切な支援のためには、介護負担感と関連する因子をまずは明らかにする必要がある。ところが、先行研究の間で一致しない知見が少なくない。この理由の一つとして、他の因子の影響を十分にコントロールしていないことが考えられる。

本研究の目的は介護負担感を軽減する介入支援策を探るために、分析の基礎作業において介護負担感との関連性が示された介入不可能な因子に配慮しつつ、介護負担感に影響する介入可能な因子を明らかにすることである。

2. 研究対象・方法

AGES(Aichi Gerontological Evaluation Study)プロジェクトの「介護者調査」のデータの一部を用いた。7 保険者において在宅サービスを利用していた介護者 7278 人を対象に、担当のケアマネージャーを通じて調査票を配布し郵送返送法で調査した。回収数 3610 名(回収率 49.6%)のうち、主介護者によって回答された 3076 名を分析対象とした。介入不可能な因子は、介護負担感との関連性が示された①介護者の年齢、②続柄、③寝たきり度、④痴呆度、⑤要介護度、⑥一日の平均介護時間、⑦目の離せない時間、⑧介護期間を、介入不可能な因子とみなした。要介護者の症状の改善により③～⑦の因子は介入可能であると考えられる場合もあるが、新名(1992)や本間(1999)は痴呆性老人側の因子は通常、介入することができないため、介護者側の因子について対応せざるをえないとしており、本研究においてもこれらを介入不可能な因子とした。介入可能な因子としては、①ソーシャルサポート、②副介護者の有無、③要介護者と介護者の間の人間関係、④十分な介護情報の有無、⑤趣味や気晴らし、⑥ストレス対処能力(Sense of Coherence, 以下ではSOC と略す)を想定した。介入不可能な因子の影響をコントロールするために、主観的介護負担感の「低い」群(19 以下)、「高い」群(20 以上)の 2 群に分けた、マッチドペア法を用いた。両群から介入不可能な因子が同一のものを 1 例ずつ選んでペアを作成した。これにより介入不可能な 8 因子は全く同じだが、介護負担感だけが異なるペアが 69 ペア作成された。この作成した 8 因子が同一のペアにおいて、介入可能な因子の割合がどの程度異なるのかについて、SPSSver12.0J のカイ二乗検定、 γ 係数を用いて検討を行った。

3. 研究結果

すでに先行研究において検討されてきた因子では、介入不可能な因子の影響を除き検討を行った結果、情緒的サポートがあり($p < 0.05$)、副介護者がいる($p < 0.05$)と、主観的介護負担感が「低い」群に有意に多かった。一方、趣味や気晴らしをしていることにより、介護負担感が低くなる、という関係は示されなかった。

従来ほとんど報告のない因子では、要介護者と介護者の間の人間関係が良く($p < 0.01$)、十分な介護情報があり($p < 0.01$)、ストレス対処能力(SOC)が高い($p < 0.01$)ものが、主観的介護負担感が「低い」群に有意に多かった。因子間の関連性の強さを示す γ 係数の高いものから低いものへと並べて示したものが表 1 である。

表 1 介入可能な因子と介護負担感の関係

介入可能な因子	関連性の強さ(γ 係数)	
ストレス対処能力	$\gamma = -0.635$	↑ 高い
要介護者と介護者の間の人間関係	$\gamma = -0.598$	
情緒的サポート	$\gamma = -0.458$	
十分な介護情報の有無	$\gamma = 0.441$	
副介護者の有無	$\gamma = 0.375$	↓ 低い

4. 考察

表 1 では、介護者の認知や主観をより反映する因子で γ 係数が高く、客観的な状況をより反映する因子で低い傾向が見える。海外における介護者への RCT 研究でも介護者に対して、専門的なケアの方法についての教育を行った群よりも、介護者に対してカウンセリングした群で 1 年後の、個人の適応と役割(Personal adjustment and role skill)で評価した介護者の適応度は優れていた(Evans ら 1988)とされている。介護負担感の軽減のためには、客観的な状況を変える支援だけではなく認知や主観への介入が必要であることを示唆していると思われる。

5. 結論

介入不可能な因子の影響を考慮し、介護負担感と介入可能な因子の関連について検討を行った結果、介護者の主観的な状況を反映する因子でより関連性が高い結果を示した。このことは介護負担感の軽減には客観的な状況を変える支援だけではなく認知や主観への介入が有効である可能性が示唆された。※本研究は学術フロンティア推進事業(文部科学省)の助成を受け、21 世紀 COE プログラムの研究の一環として行ったものである。

参考文献

Evans, R.L.Matlock, A.L. and Bishop, D.S.et al(1988) Family Interbention After Stroke Does Counseling or Education Help, Stroke, 19(10), 1243-1249.